

第60回 絵にかいたような「間抜け」

IT生

このところの雨はここまで降るかというくらい降り続けた。コロナを洗い流してくれればいいのにどうもそうではなかったらしい。またもや九州地方に大きな爪痕を残してしまった。九州は毎年のように線状降水帯とやらが居座り、ご丁寧にも毎回異なる地方に被害をもたらしている。そういったこともあって、今回の豪雨で被害をこうむった球磨川水系では、防災計画をねっていたらしい。

その防災計画とは、「タイムライン」と名付けられたもので、河川事務所（国交省）と地元自治体が連携し、住民に避難を促すというものだ。その連携を時系列で整理して、あらかじめ、住民に避難を促すために河川事務所や自治体の役割をきめており、それを時系列で整理しているため、「タイムライン」と名付けられている。

「円高やむなし」「自ら首絞」

プラザ合意後、1ドル240円が40円

検討されている避難情報の見直し案

警戒レベル	状況	避難情報	警戒レベル	避難情報
5	災害発生	災害発生情報	5	【緊急に安全を確保するよう確保す情報】(名称未定)
4	発生の恐れ(避難時間確保困難)	避難指示(緊急)	4	避難指示
3	発生の恐れ(避難時間確保可能)	避難勧告	3	避難準備・高齢者等避難開始

→

避難情報「指示」に一本化

勧告廃止、逃げ遅れ防ぐ

政府検討

九州地方を中心とした今月の豪雨など近年相次ぐ大規模災害を受け、自治体の避難情報の見直しを進めていた政府が、避難勧告を廃止して避難指示に一本化する方針を固めたことが25日、分かった。災害対策基本法に基づく避難勧告の見直し案をまとめた、来年の通常国会に改正案の提出を目指す。115面に「分かりやすく」

現行制度では、災害発生の際、自治体はまず高齢者など災害弱者が避難を始める基準となる「避難準備・高齢者等避難開始」を発表する。5段階の警戒レベルでは「3」に相当する。気象情報などが警戒レベル「4」を示す状況になると、避難に要する時間を確保できる場合は「避難勧告」を確保する。この場合、避難勧告は「避難指示(緊急)」を出す。

「5」は災害が既に発生している状況とされるため、避難勧告と避難指示はともに「4」に位置付けられている。そのため、複数の自治体などから「タイミングが2つあって分かりにくい」「勧告の意味が誤解され、指示待ちになる」といった声が上がっていた。見直し案では、①避難勧告を廃止し、勧告を発表するタイミングで避難指示を出す。避難に要する時間の確保が困難か、すでに災害が発生している警戒レベル

天神祭 コロナ退散

日本三大祭り之一的、大阪府(大阪市北区)の天神祭は25日、木曜日の例年祭りのハイライト



またもや小手先の対策でお茶をにそうとする、懲りない国の防災対策

ところが、今回の球磨川水系では、100人近い犠牲者を出した。つまり、国交省が進めているタイムライン防災が全く役に立たなかったことを証明してしまったのだ。

なぜか。そもそもあらかじめ設定された時系列に、事態が推移しなかったこともあるのだが、避難を呼びかけるにも、住民の避難計画が不十分で、逃げろといったところで、逃げなかったからだ。

もともと、タイムラインは米国からの輸入品だ。米国では、ハリケーン対策として導入し、関係機関がハリケーン情報を共有し連携して、被害を最小限に食い止めるために導入された。しかし、日本と米国では気象条件が違いすぎる。そもそも進路が分かるハリケーン対策と、不確定要素が多い豪雨災害とでは比較にならない。また、危機管理意識が高く情報を自分でとりに行き身を守る米国民と、そうではない日本人との違いもある。

そんなことを検証せずに、タイムライン防災を全国に広めようとしているのだから、これ以上、表現のしようがないほど、「間抜け」なのである。

(令和2年7月)